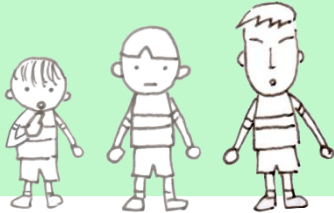


知的発達障害の家族の



日々10

大谷 多加志



内と外

ある施設でのやりとり その①

母 親『この頃、家に帰ってからすごく不機嫌で…。下手に声をかけると余計に荒れるのでそっとしておくようにしているのですが、そちらの様子で何かお気づきのことはありませんか？』

施設職員『施設の方では、いつも通り真面目に仕事をしていて、休み時間も友達としゃべったり、ゲームをしたりで、特に機嫌が悪い様子はないですけど…。』

ある施設でのやりとり その②

施設職員『この頃何かずっとイライラした様子で、友達に怒鳴ったり、手を出しそうになったりするので、周りの子も怖がってしまってます。今は別室で作業してもらうようにしているのですが、何かお家の方で最近変わったこととか、お気づきのことはないでしょうか？』

母 親『家ではいつも通り落ち着いています。ただ〇〇くんが邪魔をするとか、〇〇先生に怒られた、というようなことを言っていることがあるので、施設の方で何かあったのかなとは思っていたんですけど…。』

同じようなやりとりの経験がある方も少なくないのではないのでしょうか。

このような場合、落ち着いている姿しか見ていない立場の人は、別の場で起こっていることに対しての緊迫感を持ちにくく、協働して事態に対処するという関係を構築することが難しくなりやすいように思います。

このように場面によって見せる姿が違ふというのは誰しもにあることですが、障害をもつ人の場合、それがやや無自覚的に行われる場合があるかもしれません。

弟は、昔から学校では優等生でした（遅刻は常習犯なので、登校するまでは別ですが）。家での横柄な姿を知っている家族としては、中学校では先生に対して「はい！」と背筋を伸ばして返事をしている姿を、やや違和感を持って見ていました。先生は、決して厳しいとか、怖そうとかいうタイプの方ではなく、非常に温和な方でした。

基本的に、小学校の頃の方が、学校での適応はよくなかったように思います。学校に行きたがらなかつたり、途中で帰ろうとしたり、先生の手を焼かせていました。一方で、家と学校とで、それほど姿に差を感じませんでした。

中学校や支援学校の高等部にいたころは、学校での適応は格段によくなっていました。家では今一つ抑制が効かないというか、自分の思いを通すことが多くなっていました。そんな弟に対して、両親は『まあ、学校で頑張ってるから…』という理由で、なんとなく合わせるようにしていたように思います。

このように内と外とで振る舞いが違ふことに、自覚があったかどうかという点は、実は非常に重要なことだったのではないかと思います。『愚痴』もそうですが、自分の思ったことを思ったように話すことは、感情安定化の作用を持ちます。それは、単に“発散”という意味もありますが、自分でしゃべっているうちに自分の考えや感情が再確認される“自己明確化”という部分もあります。相手に対して怒って愚痴っていたつもりが、しゃべっているうちに自分の至らなさに腹が立っていることに気づいたり、相手が取った行動や態度の背景にも気がついて仕方ないなあと気持ちを収めたり、というように、

意識的なプロセスの中で、外でのストレスが消化されていくこともあります。ストレスとそれに対する反応が無自覚的に生じている場合、それは単なる“発散”にとどまり、“自己明確化”のレベルでは作用しにくいのではないかと思います。

弟は、家での不適應状態がひどくなったことで、家で暮らせなくなっていました。そして、家での不適應の根っこには、家が単なる“発散”の場になってしまったことがあるように思うのです。障害を持つ家族がいる家庭で、時々聞こえてくる『外では頑張ってるから・・・』という言葉。我が家の個別的な事情に引っ張られ過ぎているのかもしれませんが、“仕方ない”では済まされないものを含んでいるように思えてしまうのです。

10 回に渡って連載してきましたが、今回でいったん区切りにすることにしました。ひとまず連載開始時点で書きたいと思っていたことは一通り書けたというのが、理由の一つです。また、一時期は落ち着きかけていた弟の生活が、再び不安定になってきたことも、影響しているかもしれません。

連載の中で、様々なエピソードについて書いているうちに、思いがけずその時の出来事の細部を思い出すことがありました。これまでを振り返り、これからを考える一つの機会になっていたように思います。連載後ももちろん続く、彼との家族としてのこれからを、また一つずつ考えていきたいと思っています。